

[002] 総合文化学論輯表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1955346>

出版情報：総合文化学論輯. 2, 2015-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies
バージョン：
権利関係：

総合文化学会活動記録 (2014年11月～2015年5月)

論集「総合文化学論輯」(ISSN 2189-0986) 創刊号刊行。2014年11月1日。

第3回総合文化学会

第8回トランスボーダー研究会との共催

日時：2014年12月13日(土) 午後1時～6時

場所：福岡大学文系センター2階第2会議室

1. ご挨拶
2. 口頭発表

総合文化学会の第3回はトランスボーダー研究会との共同開催。若手中心の研究会との共催なのでフレッシュな発表が3本。

第1報告は、徳永翔太氏(九州大学大学院比較社会文化学府修士課程)の「グローバル・ガバナンスの再定位 ―新自由主義のメカニズムとネイションの再検討―」。

国家を超えたグローバルな管理(governance)を行うことで対処しようとするものをグローバル・ガバナンスだと定義し、そのあるべき姿を追求するという目的の発表である。若手らしいエネルギッシュな研究態度で、著名な研究を網羅する意欲が強く反映して、態度としてそのことは若手には特に必要だが、逆に論点が見えにくくなっていくリスクもある。このバランスについては、コメントの白川俊介氏やフロアーの諸先生が指摘するところである。そのうえで論理を追う。現行のグローバル・ガバナンスは、政治的規制をできるだけ排除した国際的な自由市場を創設するという新自由主義的な活動が国際機関やNGOなどのトランス・ナショナルな活動主体によって行われている。しかしそのリスクは、ナショナルな個性を奪い去っていく。特に経済的に弱い国にはそれは著しい。従って求められる方法として、多様性を尊重する意味での民主主義の実現、ナショナルな経済政策を侵害しない形でグローバルな政治的規制を行う、などが挙げられる。この結論は常識的だが、研究はそこに至る過程が重要だ。そのあたりの筋道の整理が課題だろうが、努力賞ものの発表だといえよう。

第2報告は、秋本彩織氏(九州大学先端医療イノベーションセンター)の、「世代間正義を論じるうえでの自我観に関する若干の考察 ―アヴネール・デ・シャリットの議論を中心に―」。

荒木自身がコメントを勤めたのだが論理の運びが基本的には起承転結を踏まえていたのでその点は整理しやすかった。

発表者の主張は、アヴネール・デ・シャリットの「超世代共同体論」の議論をふまえて、我々が死んだ将来においても我々のすべてが消滅したわけではなく、われわれが生きたことは個人の生物的生を超えて「自己超越」を通じて残存するというものである。

また同様な主張のロールズの世代間正義論の検討も加えて強化する。この場合の対立概念として「リベラリズムの負荷なき自我」すなわち、過去や未来に関係する慣習などのあらゆる属性がはぎ取られた純粋にいまここでの自我(selfなら自己ではないか?)が挙げられる。しかしそれでは世代間に受け継がれていく倫理や適応可能な正義などが説明できない、という主張である。

荒木がコメントした、エリクソン発達論の最終段階でも述べられるように、このような遺産の継承によって人類は危機管理の手段などの知恵を得てきたのである。

全体にすっきりして論旨も分かりやすい。自我と自己の使い分けなどの細かい問題はあるとしても、少し手を加えて、ぜひ論文にしていきたいと思う。

第3報告は、白川俊介氏（九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者）の「新自由主義・全体主義・デモクラシー —ジョージ・オーウェル『動物農場』の政治哲学—」。

すでに多くの業績のある白川氏の発表だけに、手慣れた構成で、オーウェルがソビエト社会主義国体制の風刺として記した『動物農場』を、文化や伝統よりも経済を重視する新自由主義や全体主義、デモクラシーなどのキーワードを重ねて解読する。さらに新自由主義的グローバリゼーションが進行すると一部の富裕層とそれ以外の人々との格差が激しくなる、それをのりこえる手段は、グローバルな市場に対応するグローバルな政治領域が必要だなどという議論を、コメントの松井康浩先生（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）を交えて行ったが、その過程ではきわめて有意義な情報が得られた。

以上、いずれもジョイントで行った成果を十分に感じられ、真剣に学問する若き仲間たちの熱気に感動さえ覚えた数時間だった。もちろん、懇親会の「もつ鍋」がことのほかおいしかったのは言うまでもない。

共同開催：日本国際政治学会地域・院生研究会九州地区および総合文化学会

第8回トランスボーダー研究会
第3回総合文化学会研究大会

日時：2014年12月13日(土) 13:00~18:00
場所：福岡大学文系センター2階第2会議室

第4回総合文化学会

第23回地域健康文化学会との共催

日時：2015年2月14日（土）午前10時-11時45分

場所：福岡市男女共同参画推進センターアミカス研修室A（Phone：092-526-3755）

（西鉄大牟田線高宮駅改札口左にでてそのまま歩道橋を右隣のビルへ）

1. ご挨拶・ご連絡

2. 口頭発表

発表者：緒方秀樹（佐賀工業高校・比較文学・近代文学）

発表タイトル：遠藤周作「黄色い人」における悪

発表内容：「黄色い人」は遠藤周作の初期作品であるが、この作品は戦時中を舞台としているために、悪なるものを作中に認めることができる。今回の発表では、その悪なるものとフロイトの理論の照合を試みる。

論集「総合文化学論輯」（ISSN 2189-0986）第2号刊行。2015年5月1日。